

北東北における縄文時代の鳥形土器

田中 珠美*

1 はじめに

「鳥形土器」といえば、主に西日本で出土する弥生時代や古墳時代のものが一般的であろう。しかし、縄文時代の「鳥形土器」が東北地方で散見される。これは、羽をたたんだ鳥に似た形をしており、頭部にあたる部分が開口する土器である。

「鳥形土器」は1970年代後半の青森市三内遺跡や蛸沢遺跡の調査で出土しているが、報告書では「異形土器」とされている。その後、鱒ヶ沢町餅ノ沢遺跡や青森市三内丸山(6)遺跡で同様の土器が出土したが、報告書ではそれぞれ「注口土器」、「水鳥形土器」と呼称されている。「鳥形土器」という名称が定着するのは『動物考古学』22号において成田滋彦氏、西本豊弘氏がこの名称を用いて以降と考えられる。その後、西目屋村大川添(3)遺跡で、キノコ形土製品で蓋をした鳥形土器が出土し、その出土状況が注目を集めた。むつ市内田(1)遺跡や七戸町鉢森平(7)遺跡(今年度調査)でも内部に赤色顔料が残存する鳥形土器が出土し、あらためて注目されている。

前述のように「鳥形土器」の名称定着以前には様々な名称が用いられ、大川添(3)遺跡報告書での集成(齋藤2014)があったものの、類例の洗い出しに大変苦労した。そこで、本稿では現時点で確認されている鳥形土器の出土例を整理し、いくつかの注目点について述べることにしたい。ここでは、青森県内で出土例が多出する縄文時代中期から後期前葉のものを取り上げる。様々な名称があり、土製品とされるものがあるが、すべて「鳥形土器」と呼称する。

2 現時点での出土例についての整理

鳥形土器にはいくつかの類型がある。1つは、器壁が底部から横方向に広がるものである。上から見ると楕円の長軸方向の一端に口縁(開口部)を有し、反対の端部はすばまる。三内丸山(6)例や大川添(3)例のような「水鳥」に似た器形である。もう1つは、器壁が底部から内傾しながら立ち上がるものである。上から見るとほぼ円形で上部がすばまり、肩部に開口部を有する。一戸町大平遺跡(一戸町教委2006)や宮古市田鎖車堂前遺跡((公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1998)出土例のような(水鳥に対して)「陸鳥」に似た器形である。側面から見た違いをわかりやすく言うと、神奈川県名物「鳩サブレ」と東京土産定番「ひよこ」である。ここでは便宜上、前者を「横型」、後者を「縦型」とする。このほか、どちらにも当てはまらないが肩部に斜めの開口部を有するものを「類似品」とした。

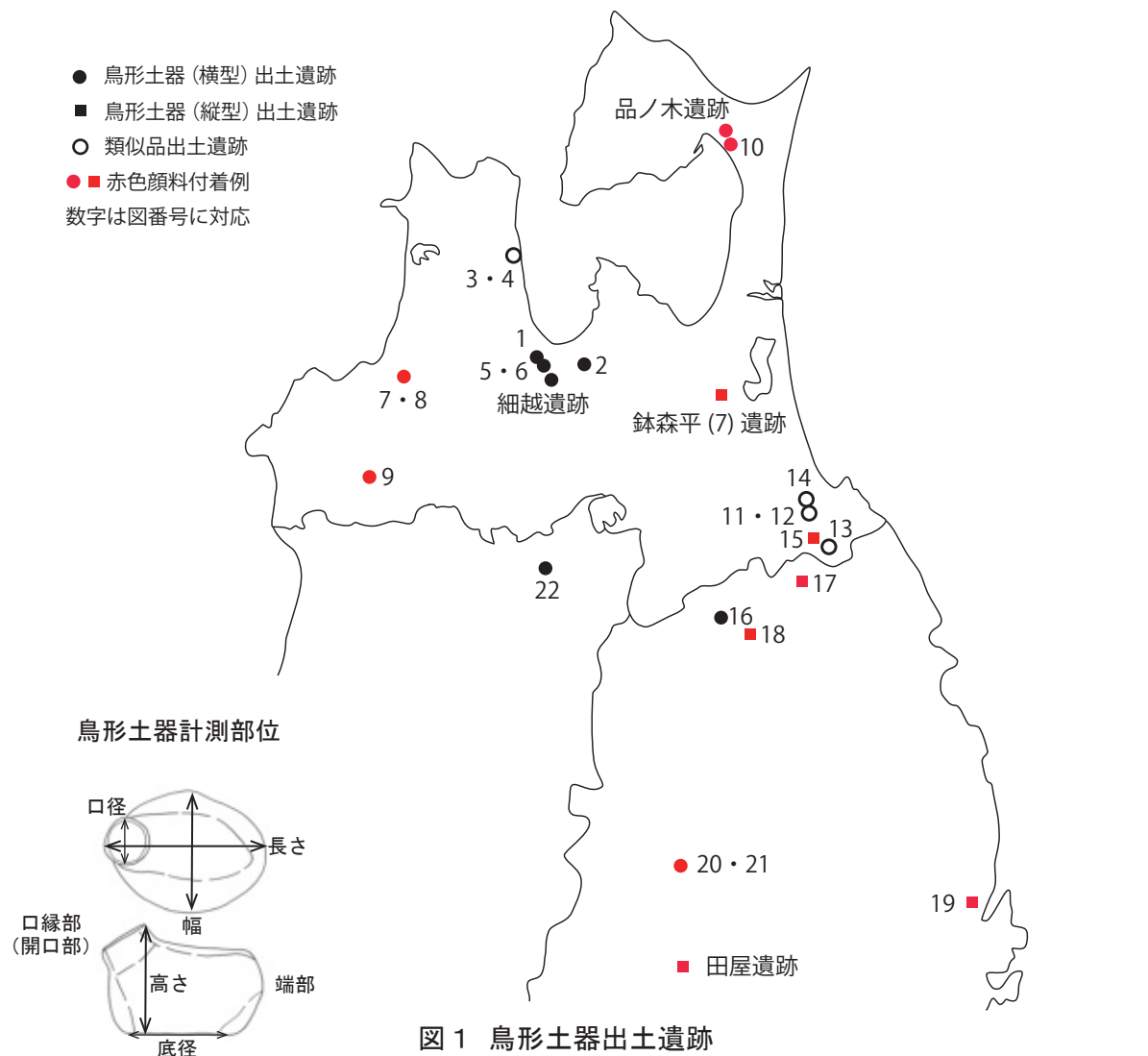
(1) 分布(図1)

青森県で14遺跡20点、岩手県で6遺跡7点、秋田県で1遺跡1点出土している。

青森県内の分布はおおまかに津軽内陸、陸奥湾西岸域、下北半島陸奥湾沿岸、県南地域の4地域である。今のところ、日本海沿岸、下北半島太平洋沿岸では見つかっていないが、ほとんどの地域で出土している(註1)。岩手県では、県南、県央、沿岸部にそれぞれ1遺跡所在し、青森県境に近い県北に3遺跡が集中する。秋田県は内陸北部の1遺跡のみである。

類型別では、横型の分布範囲が最も広く、南は盛岡市、北はむつ市である。一方、縦型の分布はこれよりも南に偏っており、南は花巻市、北は七戸町である(註2)。類似品は青森県県南地域に集中する。

* 青森県埋蔵文化財調査センター



番号	遺跡名	名称	時期	出土状況	大きさ(cm) 斜体は筆者計測					特記事項	所在地
					口径	底径	長さ	幅	高さ		
1	三内	双口異形土器	中末～後初	住居跡(J14号)	3.4/0.9	3.0	9.3	4.8	6.9	一方の側面にタール状付着物	青森市
2	蛭沢	異形土器	不明	遺構外	(3.3)	(2.8)	—	(12.0)	(6.7)		青森市
3	坂元(2)	靴形土製品		遺構外	—	—	8.9	5.1	5.6		蓬田村
4	坂元(2)	靴形土製品		遺構外	—	—	(6.7)	(5.8)	4.5		蓬田村
5	三内丸山(6)	水鳥形土器	十腰内Ⅰ	沢	4.0	8.2	13.3	10.4	9.0	置かれた状況で出土	青森市
6	三内丸山(6)	水鳥形土器	十腰内Ⅰ	沢	4.4	8.9	15.8	9.7	9.0	6から約12m離れた地点で出土	青森市
—	細越	異形土器		—	—	—	—	—	8.4		青森市
7	餅ノ沢	人面付注口土器	中期末葉	遺物包含層	4.5	9.5	18.0	(8.5)	12.8	人面付、内面赤色顔料	鯉ヶ沢町
8	餅ノ沢	把手付注口土器	中期末葉	遺物包含層	7.0	9.5	21.0	12.5	14.5	把手付、内部に赤色顔料残存	鯉ヶ沢町
9	大川添(3)	鳥形土器	中期	遺構外	9.2	5.7	17.2	7.5	7.9	内部に赤色顔料残存、キノコ形蓋付、剥落痕	西目屋村
10	内田(1)	鳥形土器	後期前葉	土坑(SK13)	—	—	(6.1)	(6.2)	—	同一個体2片、内部にベンガラ	むつ市
—	品ノ木	鳥形土器	後期前葉	表採	—	—	20.3	—	(15.5)		むつ市
—	品ノ木	鳥形土器	後期前葉	表採	—	—	(17.2)	—	—		むつ市
—	品ノ木	鳥形土器	後期	表採	—	—	16.8	8.8	8.4	内面全面に赤色顔料付着	むつ市
—	鉢森平(7)	鳥形土器		土坑	—	—	—	—	—	2点出土、内面に赤色顔料、同一遺構からキノコ形	七戸町
11	菰窪	靴形(異形)土製品		住居確認面	3.4×2.6	55×3.5	7.5	5.6	6.0		八戸市
12	菰窪	靴形(異形)土製品		遺構外	7.7×7.5	8.0×7.5	10.6	10.0	7.5		八戸市
13	田代	異形土製品		遺構外	—	—	7.1	6.0	6.4		八戸市
14	丹後谷地(4)	把手付土器		遺構外	—	—	—	—	—	付近からキノコ形出土	八戸市
15	松石橋	小型土器		住居跡(4号)	7.0×6.0	6.4	—	—	6.6	内部に赤色顔料(ベンガラ)、キノコ形の蓋付	八戸市
16	青ノ久保	異形土器		遺構外	—	—	—	—	—		二戸市
17	大日向Ⅱ	異形壺形土器	(中期末)	住居跡(OV01)	3×2	—	—	—	—	赤色顔料充填、「赤色顔料容器」	軽米町
18	大平	小型土器	(後期前葉)	住居跡(SI159)	—	—	—	—	—		一戸町
19	田領車堂前	顔料容器	中期末葉	住居跡(SI485)	2.6	9.8	—	—	15.1	身と蓋に分割、同一遺構からキノコ形	宮古市
20	大新町	皮袋形土器	中期	土坑(RD674)	4.6	6.2	16.5	7.3	9.3	口縁内外に丹塗りの痕跡	盛岡市
21	大新町	土製品	中期	竪穴(RE603)	—	—	—	—	—	同一個体2片	盛岡市
—	田屋	把手付特殊注口付土製品		ビット	—	—	—	—	13.5	把手付、内面に赤色顔料、付近からキノコ形	花巻市
22	円川原		後期		—	—	—	—	—		小坂町

表1 北東北出土鳥形土器一覧

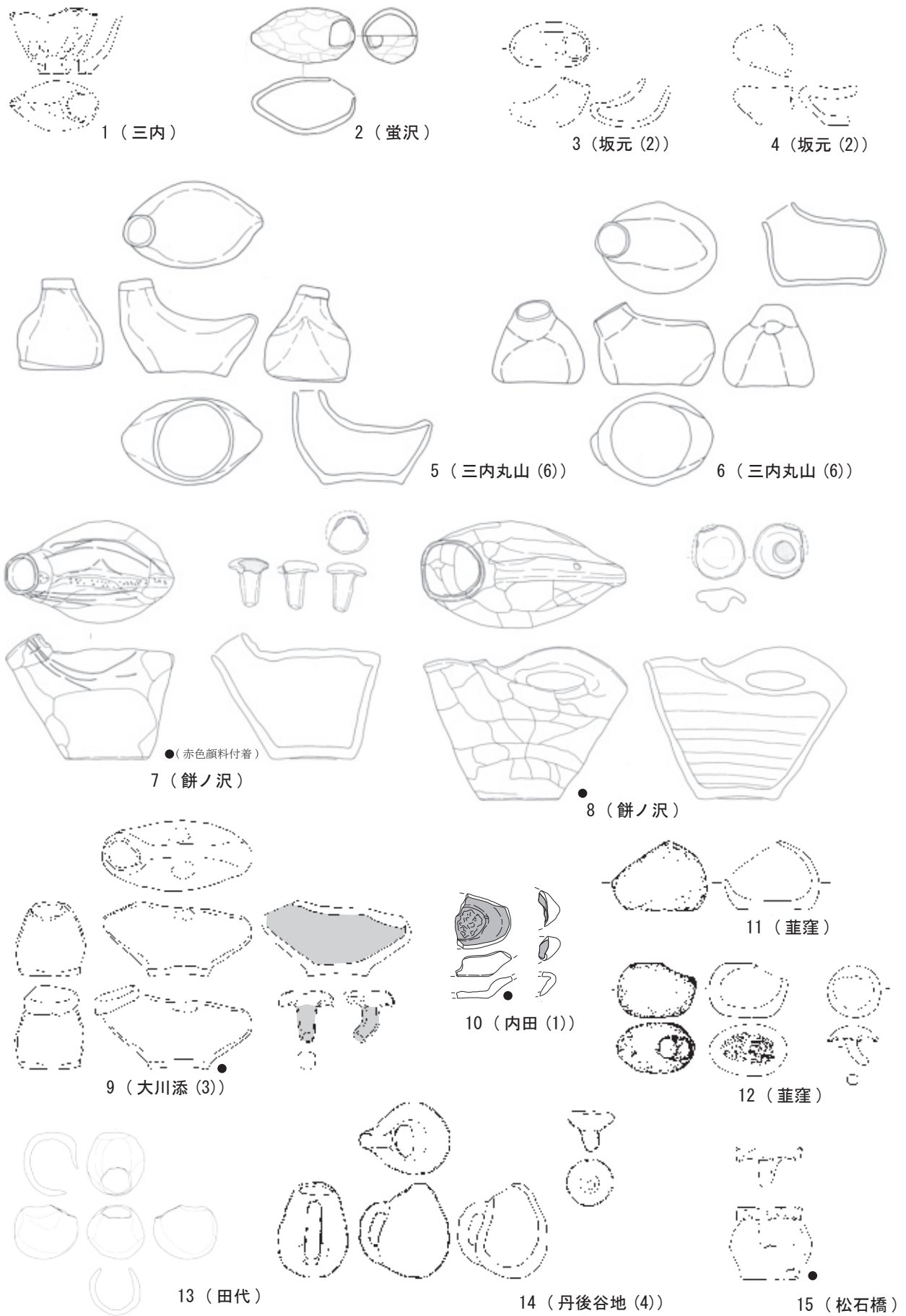


図2 青森県内出土鳥形土器 (S=1/6)

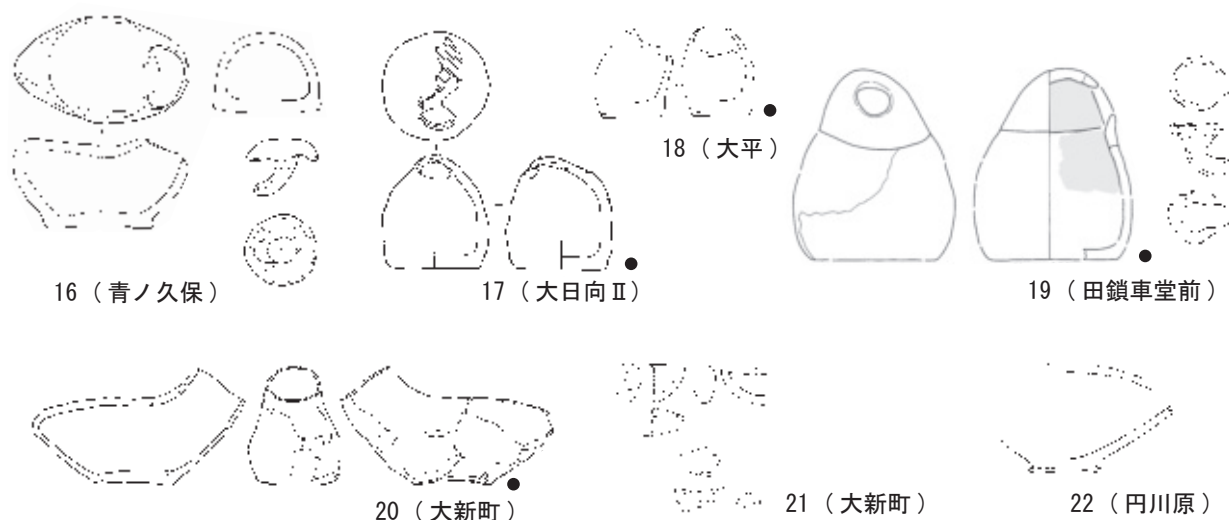


図3 青森県外出土鳥形土器 (S=1/6)

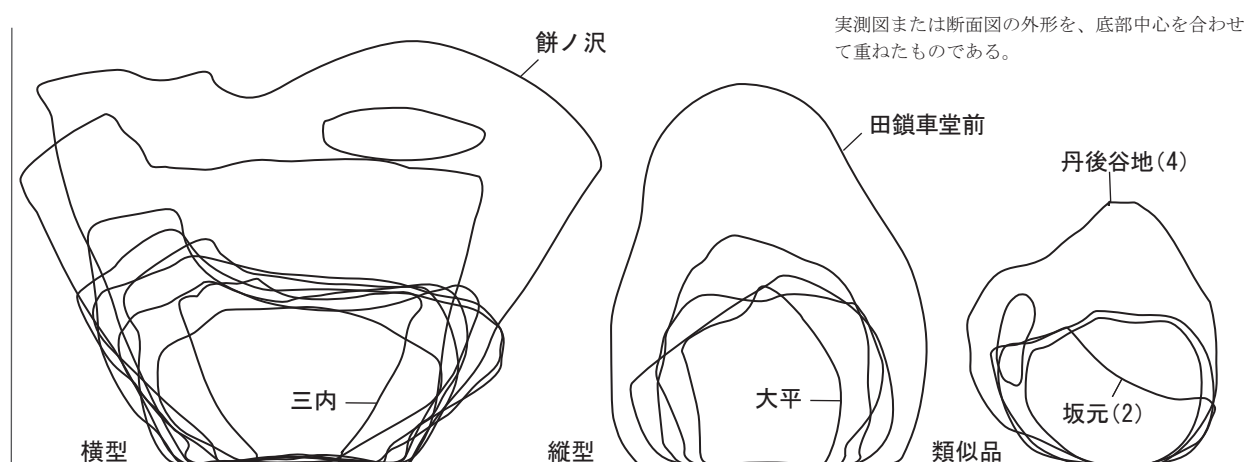


図4 鳥形土器器形比較 (S=1/3)

(2) 器形・大きさ(図2～4)

横型のうち、三内例(図2-1)、餅ノ沢例(図2-7・8)は器壁が底部から急角度で立ち上がる器形で、大きさも他とは大きく異なる。これ以外は開口部の反り具合に若干の違いが認められるものの、器形・大きさに大差はない。三内丸山(6)例(図2-5)、むつ市品ノ木例は口縁の反りが強く、側面形はJ字状を呈する。もう1点の三内丸山(6)例(図2-6)は袋に口をつけたような形で、青森市細越例がこれに類似する。

縦型は田鎖車堂前例(図3-19)が突出して大きいのが、他はばらつきは少ない。類似品は様々な器形が含まれるためばらつきがあるが、底面の湾曲がほぼ重なる点は興味深い。

餅ノ沢例の1点(図2-8)と八戸市丹後谷地(4)例(図2-14)は長軸方向に把手をもつ。大川添(3)例は胴部の稜線を挟んだ2カ所に剥落痕があり、何らかの貼付があったと考えられている(註3)。また、田鎖車堂前例は蓋と胴部に分割可能である。

（３）出土状況

遺構からの出土はおよそ1/3で、住居からの出土が最も多く7例ある。他には土坑、竪穴、ピットから出土している。岩手県内出土例は二戸市青ノ久保例（図2-16）を除き、遺構から出土している。出土層位はすべて覆土で、床面や底面から出土したものはない。

類型ごとに見ると、横型は内田(1)例（図2-10）と盛岡市大新町例（図3-20・21）が遺構から出土する以外は、遺構外からの出土または表採である。これに対し、縦型はすべて遺構出土である。

（４）文様

多くは無文で、文様が見られるのは2例のみである。花巻市田屋例は縄文のみが施され、餅ノ沢例には人面表現と沈線文が描かれる。餅ノ沢例については後述する。

（５）赤色顔料

およそ半数で内面に赤色顔料の付着がみとめられる。出土状況では遺構からの出土が圧倒的に多く、縦型はすべて遺構から出土している。分布は鳥形土器の分布とほぼ重なり広い範囲で出土しているが、顔料が付着しないものは陸奥湾西岸域に多く見られる。

（６）時期

供伴する土器や出土した遺構の時期から、中期末～後期初頭に比定されるものが多い。これ以前と考えられるのは大新町例のみで、1点は大木8b式、もう1点は大木8a式の土器が供伴している。逆に、これ以降とされるのは三内丸山(6)例、内田(1)例、品ノ木例である。三内丸山(6)例は沢で十腰内Ⅰ式の土器とともに出土しており、明確な時期がわかる唯一の例である（写真1 三内丸山(6)遺跡）。以上から、北東北南部の出土例が古く、陸奥湾沿岸域の出土例が新しいと推測される（註4）。

類型別に見ると、最も古いと考えられる大新町例、新しいと考えられる三内丸山(6)例、内田(1)例、品ノ木例は横型である。このことから、横型は分布範囲が広く、存続時期も長いと言える。縦型は、大平例が、出土した住居から後期前葉の土器が出土し同時期の可能性があるが、これ以外は中期末～後期初頭と考えられている。横型に比べ分布範囲は狭く、時期も限定的である。

（７）用途

縦型ではすべて赤色顔料が付着し、遺構から出土することから、実用的な「赤色顔料容器」の可能性が高い。田鎖車堂前遺跡では、蓋を載せた天井部を押さえながら片手で持ち、横口から振りかけるように顔料を出すという使用法が推定されている（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1998）。

一方、横型は赤色顔料が付着する、遺構出土のものは少ないことから、縦型とは用途が異なる可能性も考えられる。当センター所蔵資料を実見すると三内丸山(6)例、大川添(3)例では、頸部付け根辺りに逆V字状の平坦部があり、端部下がわずかに凹む。この頸部付け根の平坦部に親指、端部下の凹みに人差し指を添えると、ちょうど両手で包み込むように土器を持つことができる。また、これより一回り小さい三内例は、口縁を向こうにして右上部がつぶれており、ちょうど右手の拇指球をのせることができる。その状態でそれ以外の指を下に添えると、右手でしっかりとつかむことができる（註5）。これらは手におさまる形、大きさと作られていることから、手に持つての使用が想定され、手におさまらない餅ノ沢例は床に据え置いての使用が想定される。また、餅ノ沢例の1点（図2-8）と大川添(3)例では、赤色顔料は口縁にまで付着し、餅ノ沢例は把手の裏面にも付着する。これは横倒しの状

態で埋没していたためであるが、使用状況が反映されている可能性もある。

以上、これまでの出土例を概観してきた。次に、鳥形土器に関連する注目事例について見ていく。

3 八戸市松石橋遺跡出土例の詳細

松石橋遺跡では中期末葉の第4号竪穴住居跡から、内面に赤色顔料が付着する小型壺とキノコ形土製品が出土している(図2-15)。この小型壺(以下、壺)は鳥形土器には該当しないが、中期末～後期初頭の無文の土器であること、他の縦型鳥形土器と大きさが類似すること、内部に赤色顔料が付着すること等から鳥形土器(縦型)として紹介する。報告書に詳細な記載がないため、記録写真から出土位置や出土状況を推定し、壺、土製品各部位の計測、写真撮影を行った(写真1 松石橋遺跡)。

出土位置は、壺が住居西壁近くの覆土中位から、土製品はその下位、床面より約2cm上で出土していた。明確な出土地点はわからないが、土層観察用ベルトとの位置関係から、土製品は壺のほぼ直下から出土したと推測される。壺は口縁を上にした、やや傾いた状態で出土し、内部に土が堆積していた。土製品は軸を上にした状態で出土している。このような出土状況は何らかの意図をもつ可能性があるが、写真では確認できず、住居埋没過程で据え置かれたのか、または廃棄されたのか、それとも埋没後に埋設されたものか判断できなかった。

壺の口縁は7×6cmの楕円形で、底径6.4cm、高さ6.6cmを測る(筆者計測)。胴部ほぼ中央に最大径をもつ無頸壺で、口縁は内湾し、底部は台状に張り出す。無文で、外面に成形の痕跡がみとめられる。土製品は、かさが7.0～7.5cmの歪な円形で、厚さ1.4～1.8cm、上面は平滑である。軸はわずかに湾曲する。全体の高さは3.8cmを測る。この2点は胎土や焼成がとても似ており、壺の口縁と土製品の側面にはごく緩やかな起伏があり、かっちり合うように作られている。土製品の側面に指で成形した痕跡が見られることから、壺の口縁に合わせて調整したと考えられる(註6)。

赤色顔料は壺の最大径内面より下部に付着するが、頸部の屈曲内面にもごくわずかにみとめられる。顔料は上部に向かって薄くなるが、比較的均一である。土製品には赤色顔料の付着はみとめられない。これらから、入れられた顔料は土製品の軸に触れない程度の量であり、蓋をした状態で傾けたり逆さにすることもなかったと推測される。

松石橋遺跡から直線距離で約2km離れた八戸市田代遺跡でも、内面に赤色顔料が付着する壺が出土している(註7)。この遺跡では、鳥形土器類似品も出土している(図2-13)。

4 キノコ形土製品との関連性

キノコ形土製品の用途を、食用とそれ以外を見分けるための見本とする考えも提示されたが(鈴木・工藤1998)、大川添(3)遺跡の出土状況から、蓋としての用途も明らかになった。前述のように松石橋遺跡では小型壺とキノコ形土製品の蓋が出土している。これら以前にも、丹後谷地(4)遺跡や田屋遺跡では両者が近接して出土しており、関連性が指摘されていた。ここでは、キノコ形土製品が鳥形土器の蓋である可能性について、当センター所蔵資料から探ってみたい。

八戸市葦窪遺跡出土鳥形土器類似品のうち1点(図2-11)を取り上げる。これは繭を横にして、開口部と底部を面取りしたような形で、開口部側の器壁は外傾気味に立ち上がる。開口部上部周辺がわずかに削られ、平坦に調整されている。また、開口部外側に同心円状の薄い変色がみとめられ、蓋の痕跡と考えられた。キノコ形土製品(以下、土製品)は異なる遺構から出土しているが、どちらも焼成が良好で外面は黄褐色を呈する。胎土もよく似ていたため、試しに合わせてみた。土製品を少しず

つずらしてぴったりと合うところを探った。その結果を写真に示す(写真1 葦窪遺跡)。土製品の縁が開口部上部のわずかな平坦面にちょうどよく重なり、変色範囲とかさの周縁も一致した。土製品はかさを1/3程度欠損しているが、蓋と判断しても構わないだろう。

餅ノ沢遺跡では2点のキノコ形土製品が遺構外から出土している。かさの推定径が鳥形土器の口径とほぼ一致する。合わせてみると合致するが、残存部は1/3程度のため断言はできない。

また、蓋かどうかの判断はできないが、青ノ久保遺跡や田鎖車堂前遺跡でもキノコ形土製品が出土している。田鎖車堂前遺跡では鳥形土器とキノコ形土製品は同じ遺構の同一層から出土している。

鳥形土器は赤色顔料容器の可能性が考えられているが、ベンガラは空気に触れると酸化し、褪色する。これを防ぐには空気の遮断が必要で、軸で栓ができるキノコ形土製品は適していると考えられる(註8)。また、鳥形土器は口縁が斜め方向に開口するため、軸には蓋の落下防止効果もあると考えられる。特に、蓋の可能性のあるものは、軸がJ字状に湾曲し、より落下しづらいと考えられる。

すべてのキノコ形土製品が蓋とは言えないが、調査・整理の際には一考の必要がある(註9)。

5 鱒ヶ沢町餅ノ沢遺跡出土土器の文様について

餅ノ沢遺跡出土の2点の鳥形土器のうち1点(図2-7)は、人面表現をもつ。

この鳥形土器は底径9.5cm、長さ18cm、高さ12.8cmを測る(筆者計測)。側面を欠損するが、上から見ると丸みを帯びた楕円形を呈する。上面中央をつまみ上げて成形しており、短軸方向の断面形は五角形に近い(註10)。器壁は底部から最大幅まではやや内湾するもののほぼ垂直に立ち上がるが、それより上はつまみ上げられたことにより、内反気味となる。頂部は面取りされ約1cm幅の平坦面となっており、側面から見ると稜線はほぼ水平である。

人面表現は頸部上面に付される。開口側を頭とし、隅丸三角形の粘土の貼付の輪郭上に目、鼻、口を刺突で表現する。ちょうど口縁と反対の端部をのぞき込んでいるように見える。顎下から端部までの頂部平坦面上には、刺突が帯状に施される。さらに、顔と刺突帯を取り囲むような二重または三重の弧状の沈線が、器壁の屈曲部をなぞるように描かれる。

赤色顔料は胴部最大幅の内面より下部に付着するが、特に、底面から口縁側壁面にかけて色濃く付着している。

現代において赤は「血液」を表すことが多い。これは縄文時代の人々にとっても同じだったであろう。当時の人々が内部に血液(赤色顔料)を湛える土器を人体に見立てたことは、想像に難くない。しかし、この土器は「人体」という大きな括りではなく、その内部に焦点をあてたものではないか(註11)。それは「子宮」である。妊娠中、子宮では胎盤を通して母体と胎児が血液をやり取りし、酸素や水分、栄養が胎児に与えられ、二酸化炭素などの不要な物が母体に回収される。子宮内でやり取りされる血液は多量で、この状態を土器内面の赤色顔料で表現したのではないだろうか(註12)。

このように見立てると、開口部は下向きで、人面も頭が下、顎が上となり、これまでと上下逆にしてお考えなければならない(写真1 餅ノ沢遺跡)。開口部ぎりぎりに貼り付けられる顔は胎児を表すと考えられる。顔の上方に続く刺突帯は、塗りつぶしの表現で暗い空間を表現し、弧状の沈線と合わせて産道を表すのではないだろうか。つまり、この土器は「出産」を表すと考えられるのである。顔の貼付位置から、出産間近または頭が出た状態を表したと考えられる。この土器には安産への願いが込められたのではないかと筆者は考える(註13)。医療が発達した現代でさえ出産は命懸けで臨むものであ



三内丸山 (6) 遺跡



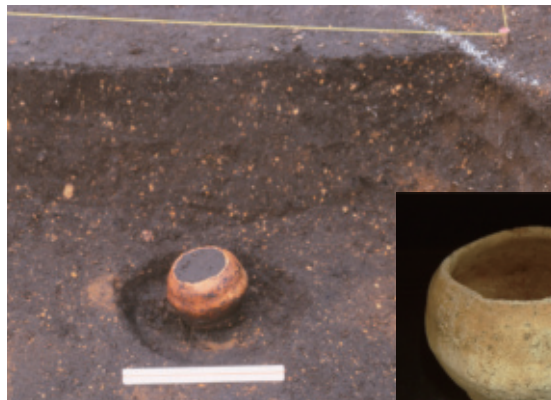
三内遺跡



鉢森平 (7) 遺跡



葦窪遺跡



松石橋遺跡



餅ノ沢遺跡
(口縁部に人面表現がある)

写真 1 青森県内出土 鳥形土器 (遺物写真は筆者撮影)

る。ましてや、縄文時代である。母子の無事を祈る気持ちはいかばかりであったろうか。妊婦を象ったとされる土偶は豊穰を祈る祭祀に用いられたともされるが、この土器をもって祈ったのは、もっと私的でささやかなものだったかもしれない(註14)。

6 おわりに

他地域、他時期の鳥形土器について少し触れておく。後期後葉以降に多く、福島県上ノ台A遺跡、埼玉県小林八束1遺跡で無文のものが出土している。岩手県貝鳥貝塚、福島県根古屋遺跡、東京都なすな原遺跡出土のものは文様があり、鳥を写實的に表現していると考えられる(註15)。また、福島県和台遺跡、馬場前遺跡、山形県小田島城跡では、大木10式の、頂部ではなく側面に斜め方向の開口部をもつ土器が出土している。縦型とした鳥形土器との関連を調べる必要がある。

「鳥形土器」は東日本に広く分布し、名称も様々で類例をあげるにも時間が必要である。機会があれば、これらについても記してみたい。本稿について補足、指摘、類例等ご教示いただければ幸いである。

謝辞

本稿執筆にあたって、令和4年度調査第三グループ職員諸氏から多大なるご指導、ご教示をいただいた。また、成田滋彦氏、齋藤正氏から文献、類例等についてご教示いただいた。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

(註1) 下北半島太平洋沿岸では六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡や大石平(1)遺跡、上尾駸(2)遺跡など多くの中～後期の遺跡が調査されており、今後見つかる可能性は高い。

(註2) 分布範囲は変わらないが、花巻市甚五郎遺跡で、側面に注ぎ口をもつ中期の「特殊注口土器」が出土している(東和町教育委員会(岩手県)1996「町内遺跡発掘調査報告書Ⅳ 甚五郎遺跡」東和町文化財調査報告書第15集)。入稿後に知ったため、本稿では取り上げていない。

(註3) 剥落箇所を確認したところ、2カ所とも貼付の基部が残存していた。残存状況から貼付はほぼ真上に立ち上がると推測され、把手ではない可能性が考えられた。また、2カ所の剥離面の間の稜線上のやや端部寄りにも剥落痕が認められた。このことから、稜線を跨ぐC字状の貼付、または単独の3つの貼付があったのではないかと考えられる。

(註4) 同時期の関連がうかがわれる資料として、仙台市上ノ原遺跡「皮袋形土器」、新潟県阿賀町屋敷島遺跡「注口付土器」が挙げられる。「皮袋形土器」は横型の楕円形で両端がすぼまる器形で、中央に注ぎ口をもつ。「注口付土器」は上ノ原遺跡の「皮袋形土器」よりもラグビーボールに近く、中心に注ぎ口をもつ。文様から「皮袋形土器」は大木8b式、「注口付土器」は大木8a式とされる。

(註5) 手の大きさが基準となったため器形・大きさが似た可能性が考えられる。また、実測図ではわかりづらいが、これらは上から見ると左右対称ではなくどちらかに湾曲している。これが意図的なものか判断できかねるが、用途に関連する可能性もある。また、筆者の手にちょうど合う大きさであることを以て使用者または製作者が女性だとは断言できない。

(註6) 軸を上に向けたつまみをもつ蓋の可能性も考えられたが、実際に合わせてみると、壺の口縁に起伏があるため平坦な蓋と上面との間にどこかしら隙間が生じる。

(註7) 肩が張る無頸壺で、平面形は13×10cmの楕円形を呈する。開口部も5.4×3.9cmの楕円形である。高さは11cmを測り、丸底である。住居の埋没途中の窪地に廃棄されたものと考えられ、中期末葉に比定されている。赤色顔料が入った小型壺は北上市坊主峠遺跡でも出土している。

(註8) このように考える時、松石橋遺跡のキノコ形土製品は壺の口径に対して軸の径が小さく、軸の実用性に疑問が残る。あわせて、註6で触れたように、つまみとなり得る軸をあえて下向きにするなど、実用性以外の意図があるのではないか。

(註9) 平内町槻の木遺跡出土品にキノコ形土製品で蓋をした土器がある(国立歴史民俗博物館2022『国立歴史民俗博物館資料図録12 槻の木遺跡出土品』)。土器は無文の壺形土器で、晩期のものと考えられる。土器の詳細や出土状況についての記載はないため、詳細は不明である。

(註10) 頂部内面には粘土をつまみ上げた痕跡が残る。同様の製作方法は餅ノ沢のもう1例と大川添(3)例に見られた。

(註11) この時期、動物をはじめとする様々なものが粘土や石で作られ、土偶の顔や四肢も立体的、写實的に表現される。これらは人々の興味関心が身近なものへと向けられたことを示し、身体の一部のみの表現は、

関心がさらに内面へと向かったことを示すのではないだろうか。寒冷化によりそれまでのような活動が難しくなり、集落に留まる時間が増えたことが一因だとすれば、ちょうど新型コロナウイルスの感染拡大により「おうち時間」が増え「巣ごもり需要」が高まった状況に似ていると言える。

(註12) 土坑内部に赤色顔料を散布した墓も同じ意味があるのではないかと筆者は考える。再びこの世に産まれてくるようにとの願いが込められたのではないだろうか。

(註13) 「キノコ形土製品との関連性」で本例にキノコ形土製品の蓋がつく可能性に言及した。しかし、安産を祈願するのであれば産道を塞ぐもの、障害になるものはない方がよいのではないかという全く逆の考え方もある。

(註14) このような文様は他になく、常々執り行われる祭祀用ではなく、赤色顔料を入れることが想定されていたため、ふと思いついて描いてみたのではないだろうか。これほどまでに安産を願って心をかけていたのであれば、当時の人々は月の満ち欠けから妊娠月齢や出産時期を導き出していた可能性も考えられる。

(註15) この他に、岩手県羽根橋遺跡、神奈川県金子台遺跡、岡山県津島岡大遺跡で、側面形がJ字状を呈する双口の土器が出土している。津島岡大例は関東からの搬入品と考えられている。

引用参考文献

- 青森県教育委員会1978「三内遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
 青森県教育委員会1984「菰窪遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
 青森県教育委員会2000「餅ノ沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
 青森県教育委員会2002「三内丸山(6)遺跡Ⅳ」青森県埋蔵文化財調査報告書第327集
 青森県教育委員会2003「松石橋遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第360集
 青森県教育委員会2006「田代遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第413集
 青森県教育委員会2011「坂元(1)遺跡 坂元(2)遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第505集
 青森県教育委員会2006「田代遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第506集
 青森県教育委員会2014「大川添(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第544集
 青森県教育委員会2018「内田(1)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第592集
 青森県埋蔵文化財調査センター 2022『令和4年度 青森県埋蔵文化財調査報告会』令和4年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会資料
 青森市蛭沢遺跡発掘調査団1979「蛭沢遺跡」
 八戸市教育委員会1988「八戸新都市区域内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 丹後平遺跡(2) 丹後谷地遺跡(4) 笹子遺跡(3)」八戸市埋蔵文化財調査報告書第27集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987「青ノ久保遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第118集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書—第6次～第8次調査—」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第273集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998「田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第718集
 盛岡市教育委員会1984「大館遺跡群 大新町遺跡 大館町遺跡—昭和58年度発掘調査概報—」
 盛岡市教育委員会1985「大館遺跡群 大新町遺跡—昭和59年度発掘調査概報—」
 岩手県二戸郡一戸町教育委員会2006「大平遺跡」一戸町文化財調査報告書第56集
 秋田県教育委員会1984「東北縦貫自動車道発掘調査報告書ⅩⅡ」秋田県文化財調査報告書第120集
 阿部昭典2009「縄文時代における徳利形土器の祭祀的側面の検討—中期末葉の東北地方を中心に—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号
 齋藤 正2014「キノコ形土製品を蓋にする赤色顔料入り鳥形土器について」『大川添(3)遺跡』青森県544集
 鈴木克彦・工藤伸一1998「きのこ形土製品について」『研究紀要』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
 東北大学文学部1982『東北大学文学部考古学資料図録』第1巻 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
 中村哲也2018「山田コレクションについて(1)」『むつ市文化財調査報告』第47集 むつ市教育委員会
 成田滋彦2005「青森県内の鳥形土器について」『動物考古学』第22号 動物考古学研究会
 西川博孝2016「有孔鏝付注口土器の正体」『研究連絡誌』第77号 千葉県教育振興財団
 西川博孝2019「有孔鏝付注口土器の正体(補遺)」『研究連絡誌』第80号 千葉県教育振興財団
 野村信生2005「餅ノ沢遺跡の土器について」『研究紀要』第10号 青森県埋蔵文化財調査センター
 文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp>